

【京都府青少年育成協会会長奨励賞】

家族をつなぐ「家族新聞」

京都府立洛北高等学校附属中学校 1年 石倉 燦旭

僕の母は、毎月新聞を作っています。その名も「四葉のクローバー新聞」。別名「家族新聞」と呼んでいます。

なぜこのテーマにしたのか、その理由は最近社会的に家族関係がぎくしゃくしている傾向にあり、それがエスカレートして殺人などが多くなっていると思うからです。

2013年の殺人事件検挙数のうち、被疑者と被害者の関係が親族間である割合は53.5%と半分を超えていました。

どうしてこのような事が起こり得るのか、それは「家族同士の会話が減り、お互いの理解や思いやりの心が薄れてきているのではないか」「家族同士だと、感情をストレートに表現し過ぎてしまい、自分をコントロールするのが難しいのではないか」と僕は考えました。そして、家族という一番小さな社会の中で、家族が平和になれば世界平和につながると思いました。

母が「家族新聞」を始めたきっかけは、遠く離れた親戚や、お世話になった方々に、子ども達の成長の様子を知らせる手段としてだそうです。

2006年春号。これが我が家の「家族新聞」第1号です。僕の1歳の誕生日のことが載っていました。その頃の記憶はありませんが、大事に育てられたという事が「家族新聞」を読んで分かりました。そして、最新号は2017年5月号で、第128号目になります。母は今もなお、「家族新聞」を作り続けています。

この文章を書くにあたり、「家族新聞」を1号から読み返しました。日常の出来事や大きなイベントなど、様々なことが書いてありました。

ひいおばあちゃんが97歳で他界したこと。

家族旅行にも何度も行った事。

我が家は6人家族なので、年に6回お誕生日会があります。

子どもが4人いるので入学式や卒業式、運動会や学習発表会など学校の行事がよくありました。全て母は見に来てくれました。

姉たちはピアノのコンクールで賞をいっぱいもらいました。上手で頑張っていました。他にも、僕が受験に合格した時も、同じように喜んでくれました。

僕は昔、魚の骨をのどに詰まらせて病院に行き、姉は胸にお味噌汁をこぼしてやけどし、緊急病院へ駆け込みました。

季節の行事は毎年家族で欠かさずに行なっていました。

我が家では、かたつむり、あり、ザリガニ、トンボのヤゴ、ダンゴ虫、カブトムシ、ハムスター、金魚など様々な生き物を飼い、観察しました。卵を産んだり、孵化したり、脱皮したり、この世を去ったり…家族で一喜一憂しました。

僕が小さい時に鹿児島から京都へ引っ越しをしました。鹿児島のことはよく覚えていませんが、かすかによく遊んでいた公園や家の様子などが思い出されます。「家族新聞」を読んで、忘れていたことも少し思い出しました。

そして、家族が一つとなった、1番大きな出来事は3番目の姉の入院と移植です。

姉は、僕がインフルエンザにかかった時によく看病してくれました。しかし、それが原因で重い病気にかかってしまったのです。姉が入院していたのでそれからずっと母に会えない期間がありました。けれど、

「自分よりも姉が頑張っているから頑張ろう」

そう思うようになりました。

姉は移植することになりました。

たまたま移植に必要なものが全て合った1番上の姉がドナーになり、家族全員頑張りました。そして、姉の病気はだんだん治ってきました。その後、他の病気に何度かかかりましたが、無事に治りました。

我が家は家族みんなで支え合い、困難な事も乗り越えることが出来ました。

それが全部詰まったものが「家族新聞」なのです。

家族の本当のあるべき姿が「家族新聞」には書かれています。家族で笑って、怒って、けんかして、泣いて、また笑って…これが本来の「家族」なのだ僕は思います。家族を殺したり、心から傷つけあうのは絶対にやってはいけない事です。

家族は支え合い、励まし合い、信頼する事で成り立ちます。将来大人になって「家庭」が出来たら、「家族新聞」を思い出し、どのように家庭を作っていけばいいのかを考えていきたいです。